

演題 6. 岩手医科大学歯学部附属病院における循環器疾患患者の臨床統計

○杉山 芳樹, 石橋 寛二, 工藤 義之
八重柏 隆, 虫本 栄子, 古川 良俊
石川 義人, 岸 光男, 佐藤 雅仁
福田 容子

岩手医科大学歯学部附属病院 MHC 連絡会議

平成 9 年 6 月から平成 12 年 12 月までの期間に岩手医科大学附属循環器医療センターおよび医学部第二内科から歯学部附属病院へ紹介された患者 463 名であった。われわれは、当院における循環器疾患患者治療の現況把握のため、臨床各科の協力のもとに、この 463 名を対象に当院での診療内容を調査した。方法は当院外来診療録を中心とした各科資料から住所、年齢などの患者基本データ、循環器疾患名など循環器センター・第二内科のデータおよび当院の治療内容など計 29 項目の記録調査であった。

対象患者の性別は男性 349 名、女性 114 名で、平均年齢は 63.2 歳であった。循環器疾患で最も多かったのは血管疾患で 232 名であり、以下、高血圧疾患、虚血性心疾患の順であった。紹介目的は精査依頼が 200 名 (43%)、一般調査依頼が 196 名であった。紹介時期は検査入院時が 153 名 (32%)、術前通院時が 7 名、手術直前が 126 名であった。当院への紹介科は 409 名 (88%) が予診科であった。診療科では 265 名 (57%) が口腔外科を、158 名が保存科を、148 名が補綴科を受診していた。当院での診断名では、慢性辺縁性歯周炎が 463 名中 188 名 (41%) の患者にみられ、根尖性歯周炎は 106 名、残根状態が 82 名にみられた。治療内容では抜歯が 463 名中 157 名 (34%) で最も多く、以下歯周治療、精査で、45% の患者に何らかの観血的処置が行われていた。治療期間をみると、52% の患者は 2 週間以内で治療を終了し、平均治療回数は 7.7 回であった。転帰は 274 名 (59%) が治療終了であった。これらの調査結果から、対象患者のうち、79% は精査以外に何らかの歯科治療を行っており、慢性辺縁性歯周炎や根尖性歯周炎など、感染源として心疾患の原因や治療に影響があると思われる病名を有するものは 66% であった。したがって、紹介を受けた循環器疾患患者の少なくとも 2/3 は、循環器疾患の治療の予後の向上のために、歯科治療が必要であったと思われる。

演題 7. 試作金銀パラジウム合金の耐食性について
—X 線光電子分析装置による表面分析—

○齋藤 設雄, 昆 隆一, 平 雅之
桂 啓文, 荒木 吉馬

岩手医科大学歯学部歯科理工学講座

鑄造用金銀パラジウム合金中の Pd は鑄造温度の上昇や昨今の Pd 価格の高騰のほかアレルギー誘因の可能性があることを考えると、できるだけ減少させることが望ましい。本研究では Pd を減らし、Au を増加させた試作合金の耐食性を検討するため、腐食液浸漬後の合金表面を X 線光電子分析装置 (XPS) によって分析した。

5 種類の試作金銀パラジウム合金と市販合金を板状サイズに鑄造し、鏡面研磨後、37°C の 0.1% 硫化ナトリウム溶液および 0.1M 乳酸-0.1M 塩化ナトリウム溶液にそれぞれ 1 日および 7 日間浸漬したものを試料とした。分析には XPS (AXIS-HSi, Kratos) を用い、励起 X 線源として Mg K α (1253.6eV) を使用した。また、試料表面のアルゴンイオンエッチングと分析を交互に繰り返すことにより深さ方向の化学状態の変化を検討した。

合金を 0.1% 硫化ナトリウム溶液に浸漬することにより、表層部に Pd と Cu の化合物の生成が確認された。また、イオウのピークが検出されたことから合金表層部に硫化物の腐食生成物が認められた。その硫化物層の厚さは合金中の (Pd+Au) モル分率の増加とともに薄くなる傾向にあり、Pd 量が減少しても Au で補うことにより、合金の耐硫化性はある程度改善されることがわかった。しかし、硫化物層の厚さは合金中の (Pd+Au) モル分率だけでなく、Cu 量の増減によっても増減していることから、硫化への Cu の関与が示唆された。一方、0.1M 乳酸-0.1M 塩化ナトリウム溶液に浸漬した場合は、腐食生成物は見られなかった。しかし、酸化物に由来する酸素元素濃度は浸漬前に比べ減少していた。